

Origins 2014 から学んだこと

藪田ひかる (大阪大学理学研究科)

(Received: August 15, 2014, Accepted: October 10, 2014)

2014年夏、Origins 2014 国際会議を終えた私は“ならロス”にかかってしまった。燃え尽きて、もぬけの殻。とてつもない眠気。しかし一方で、突き抜けた感。これから書くことは、この会議の運営を支えた日本生命の起源および進化学会の先生方のご活躍と、怒濤の日々、当日の熱気をお伝えする記録である。会議開催中、全速疾走されていた三田先生や、会場の進行を一手に担われた川村先生のお姿をご覧になった方々には、その様子の一部が既におわかりかもしれない。

2011年7月、モンペリエでの Origins 2011 国際会議にて「次回開催地は Nara, Japan」との発表を聞いた時から胸騒ぎがしていた。日本の生命起源研究者が組織レベルで世界へ飛躍するチャンスという公的な期待と、15年前の自分に海外での研究へのきっかけを与えてくれた ISSOL が日本に来ることへの私的な深謝とで心が掴まれ、運営委員でもない頃から勝手に成功を夢見ていた。ご縁あって翌年4月、Origins 2014 運営委員会 (Local Organizing Committee, LOC) に入れていただくことになった。池原運営委員長はじめ LOC 11名の先生方には色々ご指導いただきました。この場をお借りして感謝致します。

この2年間に経験した、紙面では書ききれない色々な出来事は“早送り”にしておく。ただ、確かなことは、開催までの最後の6ヶ月間、私の生活は Origins 一色だったということ。1月に参加申込みが始まると、広報担当の私のメールアドレスに一斉に、世界中からの問い合わせが毎日多数寄せられるようになった。クレジットカードが通らない、参加登録ウェブシステムの入り方がわからない、ビザレターを発行してほしい、なぜ参加登録費を事前に支払わなければならないのか、といった参加申込に関わる相談から、どこのホテルがおすすつか、奈良へのアクセスは、1日の所持金額は、など個人で調べればわかるような些細な質問まで、対応に追われ続けた。見知らぬ研究者がウェブを通さず要旨を何度と送りつけてくる困ったメールもあった。海外の運営委員 (Science Organizing Committee, SOC) からの連絡を受けることも多くなり、彼らからの提案・助言に対応するため SOC と LOC との間を調整する必要から、2月はほぼ24時間営業。

そしてたたまみ掛けるように、要旨提出の深夜、予期せずウェブシステムがダウン……。アメリカの参加者にとってはこの時間帯が申込みの最終チャンスに相当する。日本が明け方を待ってシステム復帰させてももう遅いのだ。このままでは学会に参加しようとしているアメリカ人研究者の大半を失ってしまう。夜中2時に JTB と連絡がつくはずもなく、起きていた我々一部の LOC は頭を抱え、私も胃が痛くなり眠れなかった。そんな時、Sandra Pizzarello SOC 委員長から池原 LOC 委員長にエールが届いた。切を延ばせば問題ない、Good luck、と。普段はとにかく厳しい SOC 委員長からのめずらしく爽やかな一言で、身近な解を見失うほど余裕がなかった私達

は冷静さを取り戻すことができた。翌朝、池原委員長から LOC 全体に昨夜の説明がなされ、JTB にシステム即刻復帰の指示があり、それを受けて私は各関連組織におわびと切延長を広報し、京大藤井研の江藤さんに管理いただいている Origins 2014 ホームページでも連動して新切を表示する、という円滑な段取りが進められた。SOC 委員長と LOC 委員長との間の信頼関係の上に成り立った連携プレーだったと思う。結果的に、このアクシデントは荒療治的な効果を発揮し、申込み数の飛躍的な増加をもたらした。

3~4月は要旨査読とプログラム編成に関して毎晩 SOC からメールが来るようになり、日本人の専門家にも査読に参加してほしい、査読者全員が全ての要旨をダウンロードできるシステムを作るように、会場数を増やしたらどうか、なぜ午前のセッションを8時から始めることができないのか、などの数々の提案に対して苦戦を強いられた。出張先でも Origins 2014 関係の業務は次々と降ってきて、どこにいても頭の中は Origins だった。しんどかったのは、400人分近くの要旨査読結果に基づくプログラム編成作業と、発表者1人1人への要旨採否通知をオンラインシステムに徹夜で入力しなければならなかったこと。しかし、なんだかんだいっても国際会議はあと2ヶ月に迫っていたし、成功のために貢献させていただけると思い、淡々と作業した。

5~6月、決死のラストスパート。要旨集とプログラム冊子体の作成で特に中心的な役割を担われた江藤さんには深く感謝申し上げます。迅速に正確に合理的に業務をこなされるお姿は尊敬に値すると感じた。僭越ながら、江藤さんのことは血と汗を共に流した戦友とっております。また、江藤さんを強力にバックアップなさる藤井先生と藤井研の皆さんのチームワークで USB やネームカード、ノベルティなどの配布物を完璧にご用意いただいた。当日運営の指揮と会計を兼務された三田先生には頭が下がる思いである。助成金申請や展示ブースの責任者として LOC 活動初期からご尽力くださっていた川村先生の常に公正なご意見は大変心強かった。山岸先生や大石(雅)先生が代表でご申請くださった民間団体助成金の採択も続いた。私の方はファイナルサーキュラーを作成したり、JTB の森田氏と奈良新公会堂やケータリング業者に出向きウェルカムパーティの打ち合わせを行ったりして最終段階へ仕上げ、さあ、初日は笑って迎えられるのかな・・・疲れきった心を、開催前夜まで残したまま、7月6日の朝は、来た。

6日(日)午前、LOC 委員と学生達のリレー作業で Origins 2014 のロゴが付いたコングレスバックに配布物を詰めているうちに心の準備が出来てきた。不安と緊張をまぎらわすためにロゴ付きうちわを扇ぎつつ受付に立っていると、昼過ぎから参加者達が徐々に現れ、お世話になった SOC 委員達、著名な研究者達、旧知の顔々が次から次へと登場。初日にして海外層が日本人の数

より多めではないか！ わあ、海外研究者達がうちわ扇いでるし。世界の Nara になった瞬間、緊張から興奮にギアチェンジ。感動がとまらない。オープニングセレモニーでの基調講演では、国際天文学連合会長の海部宣男先生が靴を脱ぎ能舞台へ登壇される厳粛なお姿に、身が引き締まる思いであった。食事担当でもあった私は夜のウェルカムパーティが無事に終わるまではドキドキものだったが、大宴会場を歓談の声が埋め尽くし、お料理も順調に行き渡っている様子に安堵した。海外の若手が三輪そうめんを立ち食いする姿が微笑ましい。にぎり寿司にのっている刺身だけ食べたような食べ残し状態が笑える。奈良の地酒を多種揃えてあったのも好評だったようだ。

7 日 (月) は前日につづき参加者来場数のピーク日であったところ、江藤さん、大石 (正) 先生、学生達には受付対応で大変お世話になった。木賀先生のご尽力により地球生命研究所 (ELSI) の研究者も多数ご参加いただけている様子で、とりわけ ELSI の展示ブースが人気だ。発表スライドを会場の PC にアップロードする部屋では、講演者の動画ファイルに支障があったり、ぎりぎりで手続きに来る講演者がいたりなど戸惑う事態が起こったにもかかわらず、藤井研の皆さんには冷静に解決策を見出し整然と処理して頂いた。

8 日 (火) からは精神的に余裕を持てるようになった。お昼のポスターセッションでは、Jason Dworkin と Daniel Glavin らによる膨大な隕石アミノ酸データに刺激を受けた。CH, CB 隕石でもイソバリンの L 体過剰が得られているとは。ある参加者からは、ポスターを紛失したから印刷してくれと急な懇願があって対応に困ったところを、奈良女子大の春本先生が夜に大学に戻ってポスターを印刷してくださり、窮地を救ってくださった。午後の System chemistry セッションは 60 人定員の部屋が満員で、立ち見が部屋から溢れかえった。そのため池原、藤井、三田、大石

(雅) 諸先生方と学生達と私で廊下に待機し、休憩と同時に機動隊のごとく部屋の中に突撃、一斉に机を外に運び出してスペースを増やす作戦に乗り出した。しかしそれでも立ち見が出た状況に面し、原始細胞進化の理論研究が生命起原研究において重要性を高めている昨今であることを認識した。夜は Habitability に関するディベートで、Pascale Ehrenfreund の俯瞰力に優れた美しい進行と、パネリスト達の完成度高いプレゼンテーションで魅了された。本日の締めは、アメリカの旧友らと学生達と一緒に 20 名近く連れだって、居酒屋でリラックスしたお酒。明日も頑張れる。

9 日 (水) 午前、小林先生が座長を務めてくださった。Lucy Ziurys の招待講演の最後には、ロックミュージックにのせた、巨大電波望遠鏡を建設する過程のムービーが流れた。Origins では多分野の研究者が集まることを配慮されたのこのようなユニークな工夫には学ぶものがある。Uwe Meierhenrich の招待講演では欧州宇宙機関の彗星探査 Rosetta の最新情報を聴講した。世界で初めて彗星に着陸してその場で化学分析を行うミッション。67P/チュリュモフ・ゲラシメンコ彗星に今後ますます目が離せなくなりそう。昼は庭園で集合写真撮影。実は、遠慮して後方にいた人達が写っていません (涙)。背の高い脚立を用意できなかったのが残念でした。それでも、

写真の中の大勢の笑顔からはこの会議で皆さんが幸せでいらっしゃる感じが伝わり、素直に嬉しい。この写真に写っている晴天から一転、撮影直後から大粒の雨が叩きつけるように降り出した。台風接近をちょっとした異常事態に捉えた海外研究者もいて、飛行機を 1 日早めて帰ってしまった人も中にはいたのだが、こんな悪天候でも同伴者用エクスカッションへの参加者数は予定数をはるかに超え、みなさんお元気。学生と一緒に子供をした私も東大寺大仏殿観光を楽しんだ。

10 日 (木)、ホテル日航奈良でのディナー運営が、私の本日の大仕事。会場への誘導は学生達に委ねて、JTB の森田氏と最終打ち合わせ。ISSOL 日本代表委員の島田先生と春本先生が入場チェックをご担当くださった。島田先生がワイングラスを片手に気分良さげに入り口に立っていらっしゃるお姿に‘関西人はイタリア人’のイメージを重ねる。ド派手なジャケットを着た川村先生がワインと魚の相性を語ってくださるので和んだ。次第に照明が暗くなっていき太鼓音と共に雅楽演奏と舞踊が始まると、料理を取っていた人達も途中でテーブルに戻ってきて、カメラを構えて舞台近くに集まる盛況となった。日本人でも実際魅入ってしまうパフォーマンスで想像以上に飽きなかった。その後は金屏風の前で ISSOL 受賞式。最後は会場撤収に入っても帰ろうとしない人達も多く、いい雰囲気だったのではと思う。最終日のあすが来てほしくないな、と感じた。

11 日 (金)、やることはもうほぼ終えた心境で臨む。最後のセッションとビジネスミーティングを終えて、ほんとうに、ほんとうの、終幕。皆で片付けを済ませた会場は、さみしいぐらいの静寂に戻った。三田先生の帰りの車の中は、福岡から奈良まではるばるご準備くださった PC などの必要備品でいっぱいになった。

今回の新たな気づきとして、アルバイトの学生達の活躍と成長が素晴らしかったことを記しておきたい。彼らの吸収力と柔軟力が速いことは初日から感じていたことで、簡単でも伝わる英語で参加者と交流していたし、気を利かせて参加者を助けていた。私自身の余裕が足りなかった時には、彼らの存在にこちらがすがりたくもなる頼もしさがあった。しかも、学生間でアストロバイオロジーのコミュニティを作ったとのことで、何よりと思う。また、学生だけでなく日本人若手研究者の皆さんも、彼らにとってそれぞれ大切な人間関係を深めている様子が窺えた。このような、お金だけでは支援できない PRICELESS なきっかけを、若い人達が少しでも掴めることができたなら、この国際会議の意義の一つが深まったように思う。

David Deamer の基調講演にあったように、ISSOL は今年で 40 周年を迎えた。生命の起原研究の歴史はここから始まったのだという誇りと、自分達、そしてアストロバイオロジーを、育ててくれた場所という愛着が、3 年に 1 度、人々をここに連れて帰るのだろう。最初の、純粋な好奇心だった頃に戻るために。だから、ISSOL は他よりもちょっとのんびりした“遊び”があるようにも感じる。戦略的な外交や提携とは異なる、無垢な友情が芽生え、つづく場所なのだろう。そして今、

手作り感ある温かな場所から生まれるサイエンスを、古株だけでなく周囲の仲間や次の世代と共有するために ISSOL から Origins に進化しようとしているように思う。さて、2017 年は。

池原先生が奈良を開催候補地として立候補

なさらなければこの会議は実現できなかったと思います。多くの貴重な経験を与えてくださりありがとうございました。そして、全ての参加者の皆様、素晴らしい会議を一緒に作ってくださり、深くお礼申し上げます。